

## 皮膚線維肉腫の一例

蔵本陽子, 藤山忠昭

皮膚線維肉腫は1925年 Hoffmann<sup>1)</sup>が Dermatofibrosarcoma protuberans として発表したことに始まり, 近年本邦においても, 時々報告をみる。

最近, 我々は24才女子の左耳後部に発生した皮膚線維肉腫を経験したので報告すると共に, 若干の考察を加える。

### 症 例

患者: 24才, 女

初診: 昭和53年4月20日

家族歴: 特記すべきことなし

既往歴: 10年前, 左耳後部をゲタ箱の角にあて, 赤く脹れたことがある他, 特記すべきことなし。

現病歴: 昭和50年12月, 左耳後部に腫瘍があるのを友人に指摘され, 某外科で切除術をうけた。昭和51年7月, 同部に再発したが, その時の診断は, 神経腫であった。昭和51年12月, 同部に再再発し, 手術をうけた。その時の診断は, 線維肉腫(東北大学病理)であった。その後昭和51年12月より, 翌年4月まで術後照射をうけたが, 昭和52年12月に, 3度目の再発を来し, 某医にて昭和52年12月より翌年1月まで, 抗癌剤の局注および内服療法をうけた。一時小康状態であったが, 昭和53年4月になり, 同部が再び隆起し, 東北大学皮膚科より当科に, 線維肉腫として紹介されてきた。

初診時所見: 左耳後部に, くるみ大の皮下浸潤を伴う腫瘍を認め, 表層は指頭大の2個の結節と膿苔を付着した潰瘍からなり, 凹凸不平を呈している。結節からは穿刺により, ドロットした腫瘍内容を排出した。周囲は, 鶏卵大に, 色素沈着お

よび脱失, 白毛, 毛細血管拡張等を混在した radiant skin を呈している (写真1)。

諸検査所見: 血液所見 赤血球  $427 \times 10^4$ , 血色素量 13.2 g/dl, 血小板  $20.8 \times 10^4$ , 白血球 3,900。白血球像 桿状核球 10%, 分葉核球 36%, 好酸球 1%, 好塩基球 1%, 単球 8%, リンパ球 44%。血沈 1時間値 4 mm, 2時間値 13 mm。尿所見 蛋白 (-), 糖 (-), ウロビリノーゲン正常。肝機能検査 モイレングラハト 5.0, TTT 1.3 単位, ZTT 5.1 単位, GOT 16, GPT 9, アルカリフォスファターゼ 4.5, LDH 240。血清 総蛋白 7.1 g/dl, UreaN 15 mg/dl。血清 Na 137 mEq/L, K 4.3 mEq/L, CL 103 mEq/L, CRP (-), ASLO 40 Todd 単位, RA (-)。心電図 正常。頸部リンパ



写真1. 左耳後部の腫瘍

節は触知しない。胸部および頭骨X線像 共に異常なし。

治療：昭和53年5月11日，周囲の健常皮膚を含め，13×5×9 cm の範囲，深さは骨膜も含めて全

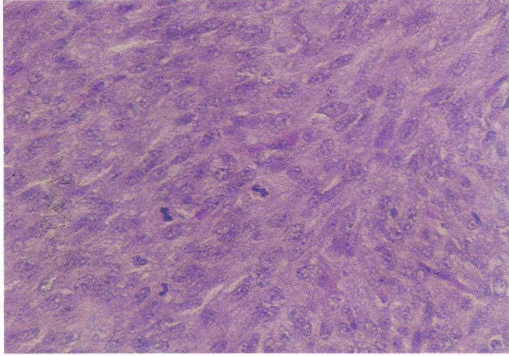


写真2. 弱拡大

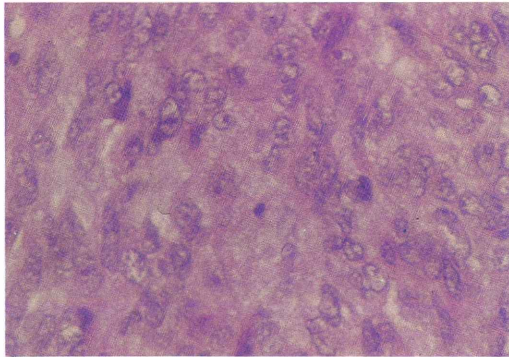


写真3. 強拡大  
異型性に富む紡錘型の腫瘍細胞

切術を行い，欠損部は頭頂部を茎とする transposed flap で修復した。腫瘤は，弾性硬で充実性，皮膚と密に癒着しているが，下床との癒着はなく，頭骨は正常であった。周辺組織との境界は，肉眼的に不鮮明で，被膜の形成はみられなかった。

組織学的所見：異型性に富む，紡錘型の mesenchymal cell が充実性に増殖し，細胞間には繊細な collagen fiber が介在しており，全体として波状および渦状を呈している。核分裂像も多くみられる（写真2, 3）。

経過：術後1年3カ月現在，再発は認めず諸検査成績にも異常を認めない。

## 考 察

名称について：皮膚線維肉腫は，1925年 Hoffmann<sup>1)</sup>が提唱した Dermatofibrosarcoma protuberans の名称が一般的であるが，文献的には，種々の名称があり，確立されたものでない（表1）。それは即ち，本症の本態が明確にとらわれていないことを示すものである。本症の診断には，Pack & Tabah<sup>2)</sup>その他ら<sup>3,4)</sup>も指摘しているごとく，組織学的所見よりも，臨床事項が重要であるとされている。それは即ち，組織像からは，fibrosarcoma, sarcomatoid fibroma, neurofibrom, neurogenic sarcoma, sclerosing hemangioma 等との鑑別が，困難であるとされているからである。自験例においては，組織学的には，かなり異型性に富み，悪性度が強かったが，比較的長期な経過にもかか

表1. 名 称

- |     |  |
|-----|--|
| 1.  | hypertrophic morpohoer(Sherwell, 1890)                             |
| 2.  | sarcoma-like tumors resembling keloid(Taylor, 1890)                |
| 3.  | dermatofibromes progressifs et recidivants(Darier & Ferrand, 1924) |
| 4.  | derma to fibrosarcoma Protuberans(Hoffmann, 1925)                  |
| 5.  | recurrent fibromatous tumors of skin(Willis, 1928)                 |
| 6.  | dermatoneuroma(Mosto, 1929)  |
| 7.  | dermato schwannoma(Mosto, 1929)                                    |
| 8.  | dermatofibromatosis protuberans et progrediens(Bezency, 1930)      |
| 9.  | Sarcomatoid fibroma of the skin(McMaster, 1934)                    |
| 10. | dermato fibromatosis sarcomatodes(Pollák, 1934)                    |
| 11. | dermatofibromatosis prosuberans sarcomatodes (山崎, 昭13)             |
| 12. | Primary fibrosarcoma of the skin (Mopper, 1953)                    |

ならず、転移巣は発見されず、検査成績や全身症状には、何んら異常を認めなかった。

臨床的には、局所再発性、深部組織への浸潤、皮膚の他部、リンパ節、内臓器官への転移等によって、悪性度が決定されているが、本来、本腫瘍は、転移をおこすことなく、local malignancy<sup>1,5)</sup>のものとしていた。しかし、1951年代より、少ないながらも、下層への浸潤<sup>6,7)</sup>、他皮膚への発生<sup>5,8)</sup>、血行転移<sup>9)</sup>を呈したとの報告がなされ、最近の文献には、肺転移、リンパ節転移の報告<sup>10,11)</sup>もみられるように、必ずしもlocal malignancyのみとは限らないようである。このように、臨床、組織学的あるいはその悪性度等を考えあわせると、Mopper<sup>12)</sup>のいうごとく、local malignancy的意味あいをもつDermatofibrosarcoma protuberansとしてFibrosarcomaとへだてた位置におくよりも、皮膚に原発したprimaryなFibrosarcomaであり、そしてその性状は皮膚以外の部に発生したFibrosarcomaよりも、予後良好なものが多く、組織学的には、いろいろな段階を呈するとした方が、理解しやすいのかもしれない。

臨床像について：本腫瘍の発生はfibrous plaque stageとtumoral stageの2期に分けられるとされている<sup>13)</sup>。すなわち、fibrous plaqueの上に数カ月から数10年後に小結節を生じ、tumoral stageに入り、急激に増大して隆起性腫瘍に発育する。大きさは、直径0.5~20 cmまでいろいろであるが、直径5~6 cmが最も普通にみられる大きさであるという。自験例では、初発時は、鳩卵大であったと思われるが、当科初診時はradiant skinも含めて鶏卵大に変化し、その中央部に、くるみ大の皮下浸潤を伴うもり上りを認めた。

好発部位について：軀幹に最も多いとされており、自験例のごとく頭部のものはPack & Tabah<sup>2)</sup>は39例中1例、Taylor & Helwig<sup>14)</sup>は115例中12例、本邦<sup>15)</sup>では89例中7例と比較的少ない。

性別、好発年齢について：文献によると、性差はないが、やや男に多いとされている。初発年齢は、生下時より、82才まで広い年齢層にわたっているが、青壮年期に初発しているものが多い<sup>15)</sup>。

自験例は、24才、女であった。

病理組織学的所見について：本腫瘍は、膠原形成能をもった紡錘型細胞からなる真皮のsarcomaで、かつ腫瘍細胞が束状となって錯走し、波状~渦巻状を呈すとされている。自験例も、典型的で、紡錘型細胞が密に増殖し、全体として波状および、渦状を呈しており、細胞分裂も多かった。

局所再発について：20~50%の再発率が報告されており、初回手術より、再発までの期間は一年未満が多いとされている。自験例も3度の再発をみているが、いずれも半年ずつの期間をおいていた。しかし、自験例のごとく、広範囲根治手術により完治できるものと思われる。

転移について：他臓器への転移はまれとされていたが、McPeak<sup>16)</sup>らは86例中5例に、本邦<sup>15)</sup>では93例中8例に転移が報告されている。自験例は、初発より3年8カ月現在、転移は認められない。

## む す び

24才、女。左耳後部に発生した皮膚線維肉腫の一例を報告し、特に名称について若干の考察をのべた。(本症例は第223回日本皮膚科学会東北地方会に於いて発表した。)

## 文 献

- 1) Hoffmann, E.: Über das knollentreibende Fibrosarkom der Haut, Dermatol Zschr., **43**: 1-28, 1925.
- 2) Pack, G.T. & Tabah, E.J.: Dermatofibrosarcoma protuberance. A report of thirtynine cases, Arch. Surg., **62**: 391-411, 1951.
- 3) Virmani, P.: Dermatofibrosarcoma protuberans, Brit. J. Surg., **49**: 435-437, 1962.
- 4) Hoffert, P.W. & Bronz, N.Y.: Dermatofibrosarcoma protuberans. A review of the literature and presentation of three cases, Surgery., **31**: 705-715, 1952.
- 5) Darier, J. et Ferrand, M.: Dermatofibromes progressifs et recidivants ou Fibrosarcomes de la peau, Ann de Dermat, et Syph., **5**: 545-562, 1924.
- 6) Fettich, J.: Dermatofibrosarcoma protu-

- berans with periosteal reaction, Acta. Derm -Ven., **36**: 158-166, 1956.
- 7) Melczer, M. und Dvorsky, C.: Acanthosis nigricans bei Dermatofibrosarcoma protuberans mit multiplen Hautmetastasen, Hautart, **8**: 54-58, 1957.
- 8) Hausner, R.J. et al: Dermatofibrosarcoma protuberans with lymph node involvement, Arch Dermatol, **114**: 88-91, 1978.
- 9) Kahn, L.B. et al: Dermatofibrosarcoma protuberans with lymph node and pulmonary metastases, Arch Dermatol, **114**: 599-601, 1978.
- 10) Mopper, C.: Primary fibrosarcoma of the skin, J.A.M.A., **152**: 570-573, 1953.
- 11) Michaud: 4) より引用。
- 12) Taylor, H.B. & Helwig, E.B.: Dermatofibrosarcoma protuberans, A study of 115 cases., Cancer, **15**: 717-725, 1962.
- 13) 佐藤みち子 他: 隆起性皮膚線維肉腫, 一自験例と本邦報告 93 例の集計, 臨皮, **32** (1): 55-60, 1978。
- 14) McPeak, C.J., Cruz, T. and Nicastri, A.D.: Dermatofibrosarcoma protuberans. An analysis of 86 cases-five with metastasis., Ann, surg., **166**: 803-816, 1967.
- (昭和 54 年 8 月 30 日 受理)

# Piggyback法で輸液と別個に 点滴静注ができる

点滴静注用 **ケフリン**

注射用セファロチンナトリウム

2g(カ価)100ml減圧バイアル

■ 添付文書の「使用上の注意」を参照下さい。

ケフリンのPiggyback法についての説明書をお送り致します。

〒541大阪市東区道修町3-12 シオノギ製薬PR部ケフリン係宛お申越下さい。

*Lilly* イーライ リリー社提携 **シオノギ製薬** 